

特 集

共創の時狭間^{ときはざま}

—^す素の時間，二人称の時間，E系列の時間—

野村直樹

共創の時狭間^{ときはざま}—素の時間^す、二人称の時間、E系列の時間—

野村直樹

抄録

洋の東西を問わず時間は人にとっての一大関心事である。ヒト以外の生命体にとっても、実はそうなのである。季節に飛来する渡り鳥も回遊するクジラも、一日24時間を概日リズムによって知る植物も、また13年に1度大発生するいわゆる素数ゼミも、みな計時を営みのコアにおいている。これはわれわれの言う時計を頼りにしない、環境との相互作用による生態時計である。われわれの腕時計は、環境の変化に左右されない普遍時計である。では、ヒトはそういう生態時計は使っていないのだろうか。ヒトも生命体である以上、使っていないはずはないだろう。むしろ、人の生活の多くはこの生態時計を使ってまかなわれていると考えられる。本稿は、それがどのような時間であって、どのような計時機構によるものか記号論的に説明していく。これまで名前のなかったその時間のことを、「素の時間」あるいは「二人称の時間」またあるいは「E系列の時間」と呼ぶ。

Key words : 区切り, 二人称交渉体, 同期, 時計性, E系列時間

1

それはなんの変哲もない当直の晩の出来事だった。深夜精神科病棟をまわった彼は偶然50歳の女性入院患者と会話し彼女の語る半生に聴き入った。病棟は寝静まり昼間のスタッフの忙しさも叫声も届いてこない。お互い医師と患者という役割から離れて、話し合い、頷き、問いかけ、耳を傾けた。このとき二人に時計の時間とは違う全く別の時間が訪れた——時間の狭間にでも入り込んでしまったような感覚、刻みやテンポが異なる時間世界との出会い。お伽話ではないこのリアルな時間の存在を、その精神科医は「素の時間」と名付けた⁹⁾。2000年代初頭のことである。「素の時間」、なんと素晴らしい表現だろう。それは、

「具の時間」と対比して、雑多なものや想いが交錯しない、純粹であって、本来の時間を指して言っているかのようなのである。この両者の対比は前者をintrinsic、後者をextrinsicという英語で言い表すと明確になるかもしれない。それらを踏まえてこの論考は、素の時間を含め、生きている事態に密着した時間の姿を、現在のぼくの研究の進捗状況⁶⁾とともに伝えることを目的としたい。

その頃ぼくはキューバに何度か足を運び文化人類学の短期のフィールドワークを繰り返していた。キューバ音楽、とりわけそのポリリズムに関心を抱いた。あるとき、それは自分の大学の研究室でのことだが、人の姿が消え、静まり返った夜、ぼくはソン（キューバ歌謡）のCDをかけて、それに合わせて自分でクラベ（キューバの拍子木）を叩いた。が、そのときだった。「あれっ！」これまで分かっていたことが急に分からなくなる

ような感覚が襲った。クラーベのリズムは不等間隔で打たれる。しかし、これがこの音楽の時間だとしたら、われわれの知る時計の等間隔のカチカチという刻みはいったい何なのか?! 不等間隔をもってしても時間が成り立つのだとしたら? 時間っていったい何だろう!? 時間の迷宮の入り口だった。

2

考えてみるに、誰も時間をこの場にもち出して見せることはできない。時計やカレンダーは、計時の手段であって時間ではない。では、時間はどこにあるのか? 地球の自転は物理的な運動であって、それは時間そのものではない。それを24時間と定めて定量指標にしても、座標軸上に表したとしても、それらは記号化され、あるいは空間化されているのであって、恣意的である。大森荘蔵の言葉で言う「変造物」である⁷⁾。時間それ自体と本来何の関係もないではないか。それが証拠に、蜻はそんなものを時間と認識していない。では、蜻には時間はないのか? そんなはずはなからう。人間にも蜻にも昆虫にも、「生」あるものとしての時間があるはずだ。それらは、自らの「生」から独立していて関係なく一方向に進んでしまう時間とは異なるはずである。なぜならクラーベを叩くとき、時間は常にほくとともにあるからだ。

時計の時間こそが唯一時間だと思ひ込んでしまっている人には、この道理がなかなかピンと来ない。そこでこんな例はどうだろう。たとえば、あなたが遅れないよう自転車で目的地に急いでいたとしよう。子どもが横から飛び出してくるのを前方に確認できた。自転車のスピードと子どもまでの距離を考慮して、あなたはブレーキをかけて止まるか、または減速してすり抜けるか判断するだろう。これは予測(predict)することに関わるので、「測」の字が示すように何かを測っている。つまり時間を、また空間を測っている出来事なのだ。なのに、このときのあなたは(目的地に

急ぐ際に使う) 時計の時間を使って測ってはいない。たとえ物理的な時間が歴然とあなたに関係なくカチカチやっていたとしても、主体としてのあなたはその場に対処するにあたり腕時計を使っていないことは明白である。では、その生物主体はどんな時間を使っているのか? 時間が有るか無いかという話ではなく、時間は誰によって作られ、誰が計時しているのかという問題なのだ。例えば、時計の時間は物理学者によって作られ、1秒の長さが科学的権威でもって決められているように、科学的権威の及ばない蜻は時間についてはまったく無知な存在と言えるのだろうか?

3

私たちは経験知として自分に固有の時間があることを知っている。「どうしてこんなに早く時間が過ぎるのだろうか!」面白いゲームに熱中しているときなどである。あるいは、「なーんだ、まだ20分しか経ってない!」退屈な講義を聞かされているときなどである。自分が主体、つまり自分が「時計」なのだから、自分という主体の現在を境に、過去と未来がある、つまり時制(tense)が存在する。計時者が自分なので、時間は早くもなり遅くもなる。時は自分の知る遠い過去から現在を経て遠い未来まで連綿と続いている。この時計は、止まることさえある。ショックを受けたあの日、あの時刻、あなたの時計がそこで止まってしまうことは十分考えられる。「それは止まったかのような幻想だ」とするのは、科学者の幻想である。その時計はちゃんと止まる機構を備えている。それは、記憶と期待によって動く主観的(subjective)な時計なのだから、そこで、時制をその文法として持つこの「一人称の時間」のことをA系列の時間と呼ぶことにする⁴⁾。自伝や昔語りはこのA系列の時間系の中で語られる。もし時計の時間を使ってしまったら、それは語り(ナラティブ)ではなくなって年表となる。

そして次に、私たちにおなじみの時計の時間。しかし、これとてずいぶんな学習の産物なのだ。小さい息子に時計の読み方を教えたとき、何度か間違え苦労しておぼえたことを思い出す。この時計という代物は人間が作った言語であることを思い知る。さて、この時計の時間、これをB系列の時間⁴⁾としておこう。このB系列時間の特徴は時制がない、つまり無時制 (tense-less) であることだ。柱時計を凝視してみよう。過去も現在も未来も、時計の針は教えてくれない。示すことができるのは、2時の前は1時、あるいは2時の後は3時、というように前後関係という文法だけである。生きているものにとって直下の認識としての過去、現在、未来がないのだから、「変造概念」と言われても仕方がない。この時間は世界言語として地球上で同期する (global synchrony) という利便性を持つがゆえに、文明の強力な支え手となる。私たちの参加は不要で、外在化された時間であって客観的 (objective) とされるが、この時間は主体のかかわりを排除し、独立したものとして一方向に自走する。「遅刻」などという概念は、江戸時代には存在しなかった。『遅刻の誕生』²⁾という本が教えてくれている。「遅刻」はあったのではない、この時間系の支配とともに誕生したのである。B系列の時間は不自然さを備えているぶん、病理性をはらむことがある。時間に遅れる人が評価を落としたり、「時間管理ができない」と自分で自分を責めたりする。B系列の時間自体が病理的ではない——それを他者に強いるところに病理性が存在するのだろう。この系列時間は、外在化された時間として、「三人称オブザーバー」によって計時されるため、「一人称主体」によって計時されるA系列時間と対照的である。

主観的 (subjective) なA系列の時間も、客観

的 (objective) なB系列の時間も、異なる方法ではあるが計時、時を刻んでいるわけである。この「刻み」をコミュニケーション理論に沿って「区切り」(punctuation) として扱っていかう。そうすると、A系列の主観的時間は個人の記憶と期待に基づいて区切られているのがわかる。ゲームをするとき、または講義を聴くとき、「区切り」をつける者、つまり計時者は自分であって、その自分が主体的に区切るとしたら、時間は早くも遅くもなる。一方、B系列の客観的時間はどうかと言えば、「区切り」は既に付けられてしまっている。つまり、1秒、24時間は物理学的に定義されているので、その定義が世界中で同期することによってB系列時間は成り立ち機能する。B系列の時間はあなたの方で区切ることを許さない。にもかかわらず、両者とも何らかの「区切り」によって構成された時間であることには変わらない。しかし、これは裏を返せば、区切り方の違いが時間を創出することを意味する。

すると論理的帰結として、subjective (主観的) でもなく、objective (客観的) でもない「区切り」の方法があるとしたら、どうなるだろう？ まず、inter-subjective (間主観的) な区切り方によって成り立つ時間系が想像できるかと思う。主観的時間であるA系列は、「一人称」の主体によって創出され計時される。客観的時間のB系列は、既成の「区切り」(カチカチ) が「三人称」のオブザーバーによって計時される。しかし、inter-subjectiveとして主体が二人 (あるいは2個体) かそれ以上になった場合、「区切り」は、両者による共同作業に移行する。言い換えると、それは参加者同士のコミュニケーションが執り行う「区切り合い」ということになる。

そういう「区切り合い」は、私たちの日常生活において枚挙にいとまがない。会話、ペアダンス、共同歩調、合唱、追いかっこ、二人で

物を運ぶとき、などなど。会話を例にとれば、一方が話す時、もう一方はそれを聞く、それが交互に繰り返されることをターン・テーク（turn taking）⁵⁾という。両者が同時に発話したのでは、会話は成り立たない。顔きも、話す番の交代も、会話という協働に「区切り」を入れていく。ペアダンスにおいては、両者はステップ合わせを実現するために、お互い相手の次のステップを見込んで近未来に向けてステップを踏む。シンクロ、同調している状態を保つとは、機械的に動きが同一状態になることではない。瞬間瞬間のお互いのズレを調整しながら、そのズレを使って同期の状態に近づけようとする相互による自己修正の連続、それが可能にしている。したがって、これら会話にせよ、合唱にせよ、ダンスにせよ、そのどれをとっても時計の時間を使って行為を遂行している者はいない。いわんや、自分だけの時間を使って相手と歩調を合わせるのには無理がある、相手の足を踏んでしまうのがせいぜいである。

この相互調整を進める過程で、その時その場でのローカルな同期、同調を目指していく時間のことをE系列の時間と呼ぶ^{5,6)}。調整、追いつきが可能な範囲で、絶え間なく時の余白を作り続ける行為がE系列の時間の特徴である。お互いが区切っても、区切っても、ぴったり合い続けることはなく、誤差を生じ続ける。そして、次から次へと「区切り」を呼び込むトライアル・アンド・エラーの連続。その「区切り」と「区切り」の間が、時の狭間であろう。それは、一人称でもない、三人称でもない、二人称の交渉だけがもたらす共創の時狭間（ときはざま）である。この「区切り」と「区切り」の間の余白が次なる「区切り」を呼び込むという意味では、「区切り」をつけるとする現在完了形が、その「区切り」を境に現在進行形に移行し、次なる現在完了形をめざすことになる³⁾。ズレと誤差が生じることでこの記号的時間システムは運転を続ける。この系の文法は、「区切り」の相互調整にある。

7

「記号的」(semiotic) という言葉を使ったが、それは相手の動きが何らかのサインになって意味に結びつくことを指している。サインは読み手なしには機能しないものであり、野球のスライズも監督のサインがバッターに読めなければ、スライズは起きない。「区切り」という記号も可視化できないにせよ、読み手には記号として受け取られ、それが情報となって相互の行為に影響を与える。ただ、一点気をつけておきたいことがある。それは、相互作用するシステムが安定状態もしくはグルーブに入った場合、記号をレセプトしてから動くという図式はすでに放棄されていることだ。つまり、記号が発せられることを予期して、未来の記号に向けて行動が起こされていく点に注意したい。絶妙にダンスするペアは、相手の足の動きを見てから自分の足を出しているのではない。相手の未来の動きを見越して踏み出しているはずだ。テニスの選手が、ボールがラケットに当たるその前に打ち返す構えを作るように、届いてからでは遅いわけだから、未来の記号を読まなければならない。それでinteractive（相互作用的）という言葉さらには一歩進めて、synchro-active（同調作用的）、シンカーアクティブと呼んでおこう。

8

さて、ここで話を戻すと、E系列時間の計時者（タイムキーパー）はいったい誰なのだろうか？一人称の時間の場合、計時者は主体本人であったから、「私」という主体の過去・現在・未来に他者が闖入して計時を乱すことはない。三人称の時間では、計時者は物理学者もしくはそれに従う時計の利用者だから、新幹線の発車時刻が「あなた」の腹時計の影響を受けることはない。この2つはそれぞれ、計時機構が異なる時間系に属している。では、E系列の時間はどうかだろうか？それはコミュニケーションの現場で参加者たちに

よって対話的に生成されていく時間であるため、計時者は複数いてもよいことになる。それを「二人称交渉体」(the second-person negotiators)と呼んでおこう。

水族館でイワシの大群が玉のように固まって泳ぐ、いわゆるイワシ玉を見たことがあるだろうか。そこでの一匹のイワシはどのように時間を計っているのだろうか。「今日ボクはお腹がすいているから、ゆっくり泳ごう」はありえないし、「館内にある時計の秒針に合わせて回転しよう」、これもありえない。イワシたちはそれぞれが直近のイワシたちの動きに合わせていると同時に、外側で泳ぐ者はほんの少しだけ内側の者より速く泳ぐだろう。この場合、計時者はたくさんいて、「すべての個体」と言ってもよいし、「群れ全体」と言ってもよい。リズム合わせをする、タイミング合わせする全体を「二人称交渉体」と呼び、それが計時者であると表現してよいだろう。コミュニケーションでつながったシステム全体(ネットワーク)が時計性を有していることになる。それは、「くり返す」という特徴、つまり再帰的(recursive)な機構を備えたシステムがもつ時計性である。

例えば、長いロープで輪(リング)を作って、そのロープの輪を5人の大人が手に持ったとしよう。「これを回してください」という指令を受け、参加者は恐る恐る回し始めたとする。これを時計回りに回すか、それとも反時計回りにするか、誰が決めるのだろうか？また、回す速度はどうやって決まるのだろうか？ノンバーバルなコミュニケーションによって決められていくことがこの場合たくさんあろうが、ポイントは、この作業がお互いの「時刻合わせ」によって成り立っていくことだ。自分だけ強くひっぱってもダメなら、腕時計を見ながらも通用しない。異なる時間系に入らなければ、このジョイント・アクションは不可能である。互いがタイミング合わせを交渉(negotiate)していく他ないのである。この輪っかは、協力して動かすことによって時計性を帯び

る。地面に置かれてしまえば、ただのロープ、物体である。そのことから、時計性という性質も「帯びる」ものであることがわかる。これらのことは、クエン酸回路であれ、カルビンサイクルであれ、フィードバックでつながったりカーシヴな機能を持った生体サイクルが広く時計性を有していることを示唆する⁶⁾。

9

E系列の時間からいったん離れて、ここでもう一つの時間系、C系列の時間⁴⁾を紹介しておく必要がある。これは大変ユニークな考え方に基づいている。止まった時計の文字盤、カレンダー、時刻表、デジタル時計の数字、楽譜、旅程、など。これらはすべて時間の推移を表す絵や記号であり、それ自体は単なる配列であって止まっている。時計の針が動き、列車が時刻表どおりに運行され、楽譜に沿って演奏が始まれば、「描かれた時間」は動き出す。これらは、時間を動かす予定表、シナリオのようなものである。五線譜にあるように、しっかり区切りを持つシナリオでありながら、それ自体はデザインであるから止まっている。したがって、計時することはできないし、計時者もない。このことは、スクイズのサインはあっても、そのサインの読み手がいないことに似ている。また、台本があっても俳優がいないのに似ている。サインに読み手がいなければ意味は生成されないように、シナリオであるC系列の時間も、もし主体が存在しなければ、時間は止まったままである。「止まっている時間」があること自体ユニークな発想だが、この意味で、前述した「自分の時計が止まってしまった体験」は、A系列時間のもつ機構の一つと考えてもよいが、本来、主体があっても動くはずの時計から主体不在になってC系列に時間が移行してしまったと考えてもよいだろう。

サイコセラピーへの指針として考えたとき、主体がいるのに自分という時計が止まってしまった

と（A系列で）考えれば、自分と時計との関係を問い直せばよいことになる。一方、時計を前にして計時する主体そのものが消えてしまったと（C系列で）考えるのなら、主体を取り戻すことで時計は動き始めることだろう。この見方の違いは、単に理論的な領域に過ぎないと言うかもしれないが、治療者から患者へのはたらきかけの仕方（メソッド）が変わる可能性をもつ。一見、どうってことのないように思われるC系列の時間は、実は大変パワフルな概念であって、平面地図と時間を架橋し一体化する立役者なのだ。

10

ではここで、これまでの話をまとめたものを図表に示してみよう。

表1 記号作用としての時間：A系列時間～E系列時間

| | A系列の時間 | B系列の時間 | C系列の時間 | E系列の時間 |
|--------------|-------------------|----------------------------|-------------------|-------------------------------------|
| 文法 (区切り方) | 時制 (過去・現在・未来) | 順列 (前後関係) | 配列 | 相互調整 |
| コード (時計) | 主観的、内在的、 個体コード | 客観的、外在的、 普通コード | ノンアクティブな 静止コード | 同期進行する (synchroactive) 関係性コード |
| 計時法 | 記憶と期待によつて | 普遍同期 (global-synchrony) | 計時しない | 局所同期(local-synchronization) |
| 計時者 | 一人称行為体 | 三人称 観察体 | 計時者不在 | 二人称交渉体 |

11

こうして時間系列を表にしてわかってくることは何だろう。一つには系列間の関係が見えやすくなることだろう。A系列から時制を取り外すと、そこにB系列時間が残る。つまり、過去、現在、未来という主体に付随する一貫性を奪ってしまえば、残るのは前後関係のみのB系列になる。そうして抽象化、客観化されたB系列から更に前後関係を奪ってしまえば、そこにC系列の時間が残る。2時の次は3時でも1時でもよいという系列ができる。なぜなら、前後関係を取り外したその「絵」は、どの方向から読んでもよいからだ。ピ

カソの絵を左から右へと目を移さなければいけないというルールはない。C系列時間の特徴、つまり文法構造は単なる配列にあるので、時制も前後関係もない、すなわち方向性のない「区切り」だけが残る。

では、更にそのC系列の「区切り」を取り外してしまつたらどうなるだろうか。そこにE系列の時間の可能性が見えてくる。つまり、その「区切り」が示す境界線 (boundary) は交渉の結果引かれた線というふうになる訳だから、前もって決まってもいいし、自分1人での取り決めもできない。二者かそれ以上の者たちのコミュニケーションによって、その境界の線引きが瞬時瞬時に試行されていくとすれば、そのままE系列の時間につながっていくことだろう。その時その場に即した新たな時間性 (temporality) の生成、獲得である。しかし、C系列時間の境界線を取り去った場合、このオプティミスティックな考えばかりが通用するとは限らない。つまり、「区切り」という柱の数々を外してしまうことで、系 (システム) それ自体が瓦解する危険性をはらむ。つまり、複数の個体同士のコミュニケーションが不全に陥ったとき、「区切り」があつてないような事態に見舞われる。列車の時刻は曖昧で気ままな時間に駅に到着し、団体旅行のメンバーは予定時刻になつても現れず、楽譜に示されたテンポは独りよがりの解釈によって統一性を失う。「区切り」の取り外しが、創造性に向かうか、系の瓦解に向かうか、したがって、それは「賭け」でもある。無秩序の度合いをエントロピー (entropy) という言葉で表現するが、その増大に対して、つまり系の崩壊に抗して、協働して対抗しているのがE系列の時間だろう。対照的に、B系列のエントロピーは低い。この系は揺らぎ、余白、創造性を失う代価として普遍同期 (global synchrony) を手に入れる。A系列の場合は、自前でエントロピーを下げるしかない。A系列時間におけるエントロピーの増大は、個人の時間的一貫性を直撃するため、精神的危機を伴う可能性をもつ。

一般的に、A系列時間を抽象化したものがB系列時間であり、B系列時間を更に抽象化したものがC系列時間だと言ってもよいと思うが、必ずしもこの見方のみが唯一正当であるとは限らない。系列時間の数々を並列的なもの（ヒエラルキーではなく水平なもの）と考えて、A、B、C、Eの系列は、それぞれ違った者が発する複数の「声」(voices)と考えて悪いわけではない。それは、ポリフォニー¹⁾としての時間論へと私たちを導く。ピアノ、ベース、ドラムスのジャズトリオの演奏をあなたが聴いているとしよう。最初のステージが夕方7時半だとすれば、そのB系列時間に沿ってあなたも演奏者たちも準備行動をする。演奏の少し前に到着したあなたはもうB系列の時間、つまり腕時計を気にする必要はない。むしろ慌ただしかったその日の一日をA系列時間として振り返るかもしれない。そして自分自身の時間が動き出す。しかし、演奏が始まり三曲、四曲と進むにつれ、演奏者とジャズクラブに集まった聴衆が共に息づかいを共有し、反応し合い、やがてあなたを含め演奏者と聴衆の間で一体感が生まれ、それが確実なリアリティとして感じられていく。その場における局所同期(local synchronization)からE系列の時間という、時計にもよらない、自分だけのリズムでもない時空に身を置くことになる。また、忘れてならないのは、演奏者が共有するメロディーライン、和音(chord)進行、これらも静止した時間、つまりC系列の時間としてその場に貢献しているという点だ。そうしてみると、ここにすべての時間が同時的に入り込んでいることに気づく。ある時間の声を聞いているとき、他の時間は無声というのではない、後ろに控えているだけなのだ。ちょうどベースがソロ(即興演奏の番)を取っているとき、ピアノやドラムスが微かに存在を示しながら後に控えている。いないのではない、声を潜めているのである。

楽譜や旅程表に代表されるC系列の時間は、書き換え可能であることも忘れてはならない。ジャズのコード進行表に一つコードを追加するとき、旅程表にはなかった経由地を新たに足すとき、電車の時刻表が一部改正されたときなど、それまで認識されてきた境界条件の変更は——いわば認識マップの書き換えなのだから——C系列の時間の書き換えに通じている。時間というものを「区切り」が創出する記号(code)の系列と考えれば、その記号形態の変更は異なる時間の創出となるだろう。時間は、生きたものに与えられた記号操作であり意味生成である。第3者が判定する「生存」と当事者たちにとっての「生きる」は違う。自己と無縁に自走する時間と異なり、「二人称の時間」は「生きる」に密着した共同歩調のことである。

【文献】

- 1) パフチン・ミハイル：ドストエフスキーの詩学。(望月哲男、鈴木淳一訳)筑摩書房、東京(1995)。
- 2) 橋本毅彦、栗山茂久：遅刻の誕生—近代日本における時間意識の形成。三元社、東京(2001)。
- 3) Matsuno K: On the physics of the emergence of sensorimotor control in the absence of the brain. *Progress in Biophysics & Molecular Biology*, 119: 313-323 (2015)。
- 4) McTaggart JE: *The Nature of Existence*, vol. 2, Cambridge University Press, Cambridge (1927)。
- 5) 野村直樹、橋元淳一郎、明石 真：E系列の時間とはなにか—「同期」と「物語」から考える時間系。時間学研究, 5: 37-50 (2015)。
- 6) Nomura N, Muranaka T, Tomita J, Matsuno K. Time from Semiosis: E-series Time for Living Systems. *Biosemitotics*, 11(1): 65-83 (2018)。
- 7) 大森荘蔵：時間と自我。青土社、東京(1992)。
- 8) Sacks H, Schegloff EA, Jefferson G: A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50(4): 696-735 (1974)。
- 9) 樽味 伸：臨床の記述と「義」—樽味伸論文集。星和書店、東京(2006)。